



2020年新型コロナによって世の中の光景が一変した。人々は地下鉄の席に無言で座りスマホの画面をじっと見ている。車内は沈黙が保たれ、「感染防止のためマスク着用にご協力をお願いします」の車内アナウンスが流れる。咳やくしゃみをしようものなら隣の乗客は席を移動する。たとえ混んでいてもマスクをしていないと誰もその人の横に座ろうとしない。それなのに飲食店や家庭でのマスクなしのおしゃべりや歓声に無防備と無頓着なのは不思議だ。

ずのマスクは他人への配慮ではなく、自分が目立たないためであった。他にも新型コロナ感染をきっかけに思いもよらぬ社会現象が表面化した。匿名の文書を書き付け「自粛警察」やSNSによる感染者やその家族への誹謗中傷など、日本の社会に深く根を張る監視や排除の風潮や差別と偏見の底流が一旦に表面化した。日本人は幼い頃から「みんな同じ」が良いとされ、小学校の通知表の協調性の評価は同調圧力と裏表の関係と言える。新型コロナ以前から日本社会には「空気を読め」の暗黙の了解があり、少数意見や異論を唱える人に対して周りと同じ行動をするよう強制する同調圧力が、新型コロナの出現でより過剰で陰湿な形で現れている。

新型コロナが炙り出す 社会の息苦しさ

— 同調圧力という空気 —

情報広報部副部長 山科 賢児

いや活気がなくなり閑散とし、黙々と歩く人々は皆マスク着用である。医学的にマスクが必須な時と場合はあるが、口元を隠して無表情のマスク姿の集団が迫ってくる光景は、まるでホラー映画かSF映画のワンシーンのようでもう馴染みがない。

新型コロナの感染が拡大し始めた頃、日本人のマスクを着ける動機について問うアンケートを社会心理学者らのチームが行った。マスク着用の主な理由は感染が怖いからでも他の人を守るためでもなく「みんなが着けているから」であり、感染予防が目的であるは

強いのも飛び抜けている。日本のコロナ感染対策は強制力がなく補償がはつきりしない「緊急事態宣言」であり罰則のない任意であるはずなのに、過剰に付度し「要請」に従うのも根底に同調圧力があるからである。新型コロナはまるで「感染は自己責任や罪」であるかのように感染者を犯罪者扱いにする。新型コロナの感染は偶発的で誰も罹りたいわけではない。本来は「お大事に、早くよくなつてほしい」と声をかけられるはずが逆に、感染者とその家族は謝罪に追い込まれる。新型コロナに感染した二重スキャン

ターや芸能人や野球選手も世間を騒がせ迷惑をかけ「申し訳ありません」と謝らなければならなかった。新型コロナに誰も恐怖と不安を抱え敏感になるのは当然であるが、自粛警察は抱え込んでしまった理不尽な怒りや焦燥感を外にぶつけ「自分は正義」であると自認し、緊急事態宣言中に「営業しているのは平等公平ではない」とパチンコ店の名前の公表を迫る。行政やメディアが「夜の街」は感染源であるという風評を流すのも世間の差別意識を利用した同調圧力に他ならない。春先に比べ最近では新型コロナ感染を罪や悪とする風潮や新型コロナへの不安や恐怖感を薄れ始めている。感染しても世間は感染者をバッシングしなくなり「心配」と迷惑をおかけしました」と頭を下げる場面は見られなくなった。しかし不安と恐怖で満たされたコロナ脳はそう簡単に乗り越えられる代物ではない。長いものには巻かれるという日本社会の本質はなにも変わっていない。コロナの感染が長引けば長引くほど不安と恐怖は感覚を麻痺させ思考停止を引き起こす。自分の顔を隠すマスク着用は相手にどう見られているか気を使わずに済み、対人関係の不安を軽減する効用もあり日本人の気質に合っている。そうした効用がマスクを手放せなくなる「マスク依存」を生み出す恐れがあり、新型コロナ感染が収まってもマスク着用が同調圧力に順応する新しい生活様式として定着するのが懸念がた。他者と違うのを責められおびえ、不安と恐怖が強くなる今日、マスクは日本の社会の空気を息苦しくさせている同調圧力の象徴のようだ。疑わず、自分で考えず、流されるのはやはり危険であり、その結果強要と異論が許されない社会が生み出される。マスクの息苦しさから解放される日は来るのだろうか。